



No.112

図書館の紹介

岡山県立高梁高等学校

司書 金地 南



図書館外観

本校は今年度で創立一〇二年となる伝統ある学校です。平成二十年に創立百周年を迎えるにあたって、老朽化の進んでいた旧図書館の取り壊し・新築を行いました。今年度で三年目となる新図書館は、県内の高等学校図書館としては珍しい別館の図書館で、高い天井と美しいステンドグラスのある木造建築です。



図書館内観

延床面積四四四㎡の館内には、開架・閉架合わせて約四万四千冊の蔵書があります。十台の生徒用パソコンも備えており、調べ学習の際には各グループ一台を利用することができます。閲覧席は五十四席あるほか、十人がけの長机が二台あり、調べ学習のまとめ活動や、図書委員の展示物作成などに役立っています。図書館は正門と中門のちようど間という絶好の場所にあるため、特に放課後は多くの生徒で賑わいます。最終下校までじっくり読書・勉強をする生徒だけでなく、下校前・部活前に貸出・返却を行ったり、雑誌を読みながら友達と待ち合わせをした

り、調べ学習のレポートをまとめたりと、様々な光景が見られます。落ち着いて勉強できる場所でありながら、水を打ったように静まり返るのではなく、和やかに友達同士で本を紹介し合うこともできる場所、誰もが居心地良く利用できる場として、図書館を整備・提供していきたいと考えています。

図書委員が話し合って作成した図書館だよりや展示物は、利用者からの評判も良く、貸出にもつながっています。そして、利用者からの反応が新たな図書館だよりや展示物を作成するモチベーションにつながるという良いサイクルになっています。

利用者への読書支援のために、様々なテーマで展示物を作成し、情報提供を行っています。本校図書館では、入ってすぐのところ丸テーブルを置いて季節の展示を行っていますほか、カウンターの隅や低書架の上でも展示を行っています。様々なコーナーを設置することによって「そういえば、こんなことも気になっていたのだった」と手に取るきっかけになればと思っています。

読書支援の大きな柱となっているのが、各クラス二名の図書委員です。図書委員の役割は、カウンター当番・図書館だよりの発行・おススメ本を紹介した模造紙などの展示物作成と様々で、それぞれの活動で図書委員自身が具体的な内容を話し合っ実現しています。



図書委員による読書週間展示

学習・情報支援について

授業支援や学習支援も日常的に行っています。図書館を利用した調べ学習の際には、授業を行う先生と相談しながら資料集めや使い方を指導を行います。また、図書館での活動が行われない授業についても、先生方からの「最近こんなテーマを扱っているよ」といった情報提供を元に、授業+αのミニコーナーを作っ展示しています。

小論文対策や生徒が個人テーマを設定する総合学習の際には、個々から寄せられる質問にも対応していきます。県立図書館の資料搬送便事業

などを利用して求められた資料を直接提供することもあれば、インターネットのサイトを紹介して、そこから必要な情報を探す方法を指導することもあり、質問の内容や期限によって様々な方法で対応していきま

す。さらに、図書館に設置しているインフォメーションディスプレイ(大型画面パソコン)を利用した週一回の東京大学の金曜講座も、学習支援のポイントの一つとなっています。

最後に
本校図書館では、毎日生徒から多くのレファレンス質問が寄せられます。「おススメの本はないですか」「〇〇という本を探しているのですが」といった読書関係から、「総合学習の個人テーマに関連する本を教えてください」といった学習関係のことまで様々で、順番待ちをさせてしまうほど盛況な時もあります。このような個々から寄せられるレファレンス質問への回答と、学校図書館が日常的に行っている読書支援や学習・情報支援を通して、生徒たちに図書館への信頼感・親近感を持ってもらいたいと思っています。高校を卒業してからの長い人生の中でも「困った時は図書館に行ってみよう」とす

津山中央病院 医療情報プラザ (患者用図書室の一例について)

小林 由美恵

はじめに

(財)津山慈風会 津山中央病院
(以下、当院)における患者サービスとしての医療情報プラザ(患者用図書室。以下、プラザ)運営について、概要やサービス内容、津山市立図書館との協定について等を報告する。



津山中央病院 (左側の建物1階がプラザ)

I. 病院と図書室の概要

①病院の概要
当院は、岡山県津山市に位置する総合病院である。当院の開設は、昭和二十九年七月。津山市内の開業医三名の「津山市に総合病院を」という強い意志により開院された。総合病院となったのは昭和三十五年、平成九年には国立療養所津山病院の経営移譲を受けた。移転し救命救急センターを併設する地上六階地下一階の病院として新設したのは、平成十一年十二月である。現在は、病床

数五二五床、標榜診療科二十二科、職員数約九二十名、うち常勤医およそ百名の規模を有する。臨床研修指定病院、地域がん診療連携拠点病院、地域災害医療センター(災害拠点病院)、エイズ治療拠点病院等の指定を受け、地域医療をリードする基幹病院として他機関とも多く連携し、地域住民へ全国レベルの医療を提供している。

なお、移転前の建物は津山中央記念病院(内科、病床数八十一床)として残り、津山中央クリニック(外来七科)等、複数の関係施設で多方面から住民の健康を見守っている。

②医療情報プラザの概要

平成十六年五月六日、津山中央健康管理センター一階に、医療関連の図書・雑誌・視聴覚資料を集めた患者用図書室「医療情報プラザ」が誕生した。面積一六、五三㎡のフロアに、一般向け医学書や医学辞典など書籍二、七四三冊、患者向けビデオ二二六本、健康雑誌五誌を所蔵し、来院した全ての方へ公開している。司書一名、相談員一名(二名の看護師が交代で勤務)、事務職員一名が常駐し、来館者へ様々なサービスをを行っている。

レファレンス内容は医療相談であることが多く、個別の相談室を確保して対応している。当院で看護師長

を勤めた相談員の力強いサポートを得、患者や家族の不安や迷いに寄り添える場としても機能している。具体的には、①相談員と司書が相談を受ける、②相談員が病気や治療法等についての説明やアドバイスをを行う、③司書が関連資料の検索・提供を行う、このような役割分担である。



医療情報プラザ

II. 病棟巡回貸出サービス

平成十九年二月、入院患者とその家族を対象とした病棟貸出サービスの試験運用の結果、プラザの来館者数は前年の約二倍に増加した。これを受け、平成二十年四月、病棟巡回貸出サービスを開始した。

プラザの資料をブックトラックに積み、病棟を歩いて貸出を行う巡回サービスを開始した理由は、基本的には、「病院の中に図書室がある」という情報のPRのためである。入院案内にプラザのチラシを挟み込み、病棟の掲示板にもポスターを掲

示したが、プラザの認知度は低い。入院直後の患者や家族は、検査や処置、主治医や看護師との面接等で非常に多忙であり、患者用図書室のチラシやポスターは見逃されてしまうのだ。症状によっては読書どころではない、という患者も居る。医療技術の進歩による手術後数日での退院、そもそも当院が急性期病院（救急病院）であるという実情も影響している。更に、病棟からプラザが遠いという物理的な距離の問題もある。院内を出歩きたくない、入院中の自分を他者に見せたくない・見られたくない、という患者の心情もある。これは心理的な距離、と言えるだろうか。

このような「認知度の低い理由」を多少なりとも軽減すべく、病棟を巡回して貸出サービスを行うことにした。こちらから病室へ声をかければ、症状の安定した患者や家族の目や耳に直接、院内に患者用図書室があることをアピールできる。要安静の指示の下、ベッドを離れてはならない患者にベッドサイドで、自由に本を選んでもらうことが出来る。院内を出歩きたくない患者や家族と、そうでない患者や家族とに、同じサービスが提供できる。

病院を運営する財団へは、貸出サービス試験運用の際、巡回サービ

スも行いたい旨を述べていたため、許可の下りるのは早かった。病棟を管理する看護部も「看護師の職務を妨げない範囲で協力可能」とのこと、患者からの返却資料をナースステーションで一時的に預かる、という形で協力してもらうこととなった。こうして、病棟巡回貸出サービスはスタートした。



司書は、がん相談支援センターのスタッフでもある。がん相談も多いプラザ内には、関連資料コーナーを常設。

Ⅲ. 津山市立図書館との協定

平成二十二年十月四日、津山市立図書館と当院の協定が締結され、同月十二日よりプラザにおいて津山市立図書館の本が利用できるようになった。入院療養のため地元の公共図書館まで行けなくなった患者やその家族は、プラザを通じて公立図書館の膨大な資料を利用することが可能になり、患者や家族の細かなニーズに対応しかねていたプラザは、適切な資料を提供し得るラインを手に

入れた。非常に喜ばしいことである。おわりに

三名の開業医の意志から生まれた総合病院は、岡山県北になくはならない拠点病院となった。当院にはプラザの他に職員用図書室もあり、医学専門書はもとより各診療科の学会誌も複数所蔵している。他館との相互貸借サービスを利用し、医師への医学論文取寄せも行っている。規模こそ小さいが志は高く。当院を開設した医師の想いは、他職種の後継へも継がれてゆく。今後も、患者や家族、勤務する医療従事者へ向けたサービスを一層、向上させたい。

☆個人会員の紹介☆

児童資料で子育てしてみる

岡山県立図書館 二熊 恒平

まずはじめに、まさかこのコーナーにこんなかたちで登場することになるとは思っていませんでした。だって、図書館がまったく関係ない（かもしれない）



ない）内容ですから。前号の紹介で「流行の『イクメン』」そして「育児体験記」ということだったので、自身の育児の記録を兼ねてまずはそこからお話していきたいと思えます。

と、その前に簡単に自己紹介をしておきますと、平成二十一年度から岡山県立図書館児童資料班に勤務しています。ちょうど一年児童資料班司書として従事した後、平成二十二年四月から半年間育児休業を取得して専業主夫をしていました。

1. 育児となし？

特に子育てに熱心な家庭に育ったつもりはなく（むしろ放任主義をモットーとしていた気も・・・）、なぜそう思ったのかは自分でも不思議ですが、子どもができたという時点で「そうだ、育児とろう」って思ったのです。

そして、平成二十一年五月十八日に長女の弥織（みおり）が誕生して、いよいよ一児の父となりました。待望の女の子です。生まれる前から職場で育児取得を宣言していたので、職場の理解は得やすかったし、事務的なことはスムーズだったと思います。でも、周りは当然驚きの声のオンパレード。肯定的な意見も、否定的意見もしっかり聞かせてもらいました。女友達からは絶賛の嵐でした

が、それ以外からはけっこう難しい意見が多かったように思います。ただ、それでも自分の子どもに最大限の責任を持ちたかったので、半年間でも育児休業を取得しました。

2. 子育て奮闘?

そんなこんなで、いよいよ四月から娘との密着生活が始まるわけです。この時点での育児休業は夫婦どちらか一方になるので、入れ替わりで妻は職場復帰します。正直な話、

育児に入る前は不安よりも、何とかなるだろうという楽観的イメージが強かったように思います。おむつ替えはいつもやっていたし、あやしたり、一緒に遊んだりはむしろお母さんより自信がありました。それに離乳食も休みの日には積極的に作るようにしてきました。が、仕事の合間にする子育てと専業でする子育てはまったく違った！合間ならお母さんがいるから何かしているときは見てくれるから、悩んだら相談できるけど、よくわからないことでも自分で子どもにもっともいいことを判断してまわりつく子どもの隙について家事をこなさないといけない。離乳食は休みの日だけじゃなくて毎日、しっかり三食すべて作るからレパートリーや使い回しをしっかりと考えて。さらに子どもは家事しているなんて分からないからいつもは遊び担当のお父

さんが家事をして自分をほっておくことなど許そうはずもないし。しかもうちの妻は三交代制の仕事だから帰ってこない夜が三日に一日あるため、そんな夜は泣こうが喚こうが、なんとかして自分一人で寝かしつけよう。最初一ヶ月はけっこう悩みましたよ。もっと余裕をもってこなすつもりだったのに。

育児始まって一ヶ月が経ち、娘も一歳をすぎた頃からこちらの気持ちにも家事にも余裕が出始めて、ちょうど気候もよくなってきたんだんと外に連れて出られるようになってきました。成長したこともあるでしょうが、外でいろいろ見て、触るようになって絵本への反応がよくなったように感じます。例えば近くの動物園（と呼んでいるペットシヨップ）で犬を見たら、『びょーん』の犬のページばかり繰り返し読まされたし、パン屋さんに行ったらその夜は『パンだいすき』で喜ぶし。それにこのころから好きな絵本、好きなページがはつきり始めて、そんな本はもうすでにポロポロになっているものも……。そんな娘の成長を見てよろこんでいる反面、まだまだ男性が子育てするのって大変だなって思うことも多くありました。子育ての基準が基本的にどこでもお母さんだから男性だと違和感を覚え

ることはよくあるし、授乳室が使えないから一人だとミルクもあげられない施設なんてものもあつたり……。とりあえず、半年という期間限定ではありましたが、育児のいろはは一通りマスターしてきたつもりです。最初こそドタバタでしたが、感覚が慣れてくると、これほど楽しく、刺戟的で喜びに満ちた日々はそうないと思います。いかがですか、このお父さん!!



3. 育児取得云々の前にもっと家で話し合おうよ!!

最近様々なメディアでも男性の育児参加が取り上げられ、「イクメン」なんて言葉もできていよいよもてはやされていますが、個人的にはこの「イクメン」と言われるのがあまり好きではありません。だって固有名詞をつけられるほど特別なこと何にもしてないもん。やっつてることには育児中の女性とほぼ同じことのはず。だから女性と同じ発音の「主夫」と呼ばれる方がうれしかったな。それでもそんな言葉ができるほど男性が育児に参加するようになったこと

はとても喜ばしいことだとは思いますが。しかも社会は男性も育児を取得するという動きがはじめてきているようですね、子育て談義ができる仲間が増えればうれしいことこの上ないです。あくまで育児をしながら実感した感想ですが、それでも、育児に関して女性にできて男性にはできないこと（授乳とか）があることも痛感しました。少なくともうちの子どもは誰がなんと言おうとお母さんが好きだし。（お父さんとお母さんが同等、またはお父さんのほうがいい時間が出始めたのはつい最近のことです）ただし、その逆もあることもよく分かりました。ちゃんと家庭ごとにお互いできることできないことがはっきりさせていけば、育児云々よりもっと長期的に見てもやりやすいんじゃないかなと思います。だって、そのための夫婦でしょ？

4. 赤ちゃんが求める本を探して

ただ育児を取得して日々子育てだけをして過ごしているつもりはなく、せっかくなので実益も兼ねて娘と一緒にいろいろな絵本に触れる時間はしっかりと確保してきました。もちろん、以前から児童資料担当として多くの児童書に触れてはいましたが、司書として児童書を読むことと、子どもの目線を通して見るもののギャップのようなものも実感でき

たように思います。さらに、ご存知のとおり、県立図書館には児童図書研究室があり、研究書も重点的に収集しています。それらの資料は児童資料班が担当していますが、それを見ながら感じていたのは「ほんとにこの絵本って子どもが好きなの？」ということ。もちろん、長く（僕の人生よりも）研究してこられた方々の著作も多くありますし、間違っていないとは思いますが、実感なくただ書いてあるからと利用者に紹介しても意味がないように感じていました。現在、年間に出版される児童書の約四十％を絵本が占めており、さらに最近ではブックスタート事業や絵本に対する認識の高まりから、赤ちゃん絵本のシェアは年々伸びているところなんです。なので、この育休はいい機会ですし、自分の子どもを通してどんな絵本に子どもが喜んで、親として読んであげてよかったと思えるのかを体験してみようと思えました。定番の絵本はもちろん、新作絵本まで様々なものを読み聞かせする毎日でした。まだ道半ばですし、ここで詳しい内容を語ることは控えておきますが、いつか何らかの形に仕上げるのができたらと思いつつ、今も明日一緒に読む本を考えているところです。

いよいよ十月から職場に復帰して多くの同僚、友人、そして利用者の方々から温かく迎えられ、改めてスタートを切ったところです。最近では、こどものほんのへやでも子どもを連れただお父さんの姿がよく見られるようになりまして。僕としても育児休業をとって見えてきたことを読書相談に活かしたり、実体験に基づいた講座を開催したりするなど自分なりに成果に結びつけていけるよう考えていきたいと思います。せっかく児童資料を担当させてもらっているので、まずはそこから。



次回は倉敷中央高等学校 加茂 清太郎さん です。

企画委員会の紹介

委員長 高橋 潤子

(岡山県立図書館)

県立図書館のサービス第二課で社会科学カウンターの担当をしております。社会科学班では、ビジネス支援サービス、法情報提供サービス、教育活動支援サービスも行っています。

この度、第一回の企画委員の場で

委員長にご推薦いただき、思い切ってお引き受けることにしました。これから二十三年度末まで、微力ながら企画に携わらせていただきます。

岡山県図書館協会は平成二十三年度に創立六十周年を迎えます。県内の図書館関係者が館種を越えて連携し活動する組織として、協会の方々にご協力いただけるように、また県内の図書館、読書活動がより活発になることを目指してがんばっていきたいと思います。

副委員長 森山 康子

(倉敷市立児島図書館)

今年四月から、児島図書館に勤務しています。市内の図書館を転勤しながら、あちこち回っているのですが、地域によって雰囲気は違います。私自身、同じ倉敷市内なのに、転勤するまでは水島や児島にはほとんど縁がありませんでした。通ってみて初めて（こんな所だったんだな）とわかります。

企画委員会では、同じ岡山県内のいろいろな地域の図書館から企画委員が集まっています。話し合いをする中で、お互いの図書館のことなどが身近に感じられるといいなと思います。どうぞよろしくお願いします。

企画委員 林田 敏之

(津山市立図書館)

図書館が多様化する人々の学習ニーズに対応する身近な情報センターとしての役割を果たしていくためには、専門知識は勿論ですが、社会を取り巻く変化や電子技術の動向にも対処できる環境が求められます。しかし、図書館などの文化施設は、好景気の恩恵は常に最後で、不景気のほこさは真っ先にというイメージもあります。委員として単なる経営論に終始することなく、強い理念（理想）を常に維持しその重要性をアピールし続けることが利用される人々の利益に繋がると確信しています。

企画委員 那須 祐子

(岡山県立図書館)

県立図書館の総合サービス班にて、主に障害者サービスの担当をしております。今年度の障害者サービスは、著作権法の改正もあって、大当たり、大忙しの一年でした。

それに加えて、今年度の企画委員も、どうやら大当たり(?)の年のようです。協会創立六十周年記念式典という大きな行事を控えているとか・・・。司書の中では、まだまだ若手で経験不足ですが、先輩方の知恵と経験を学んで、企画に役立てていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いします。

企画委員 梅田 雅也

(岡山市立中央図書館)

今では記憶から遠く離れた、あの猛暑が続いた八月に、第一回目の企画委員会がありました。その会議で思ったのは、皆さん色々なことを知っていて、色々な人を知っていて、すごいなあ、ということ。県外から岡山に来て早や十年。いかに自分がぼーっとして過ごしてきたのがよく分かりました。こんな自分で役に立っているのでしょうか。不安です。他の企画委員の方の陰に隠れて、こそこそと、ひそひそと、お邪魔にならないよう、手足となつて働きます。何とか乗り切れてよかったです。と思える日が早く来ますように。

企画委員 丸山 桂子

(早島町立図書館)

半人前も甚だしいものの、今年度より企画委員をさせて頂いたことになりました。

小さい図書館ですから、普段は問題がおきる度にはない知恵を絞って仕事をしているわけですが、ややもすれば他館の様子が判らなくなつてしまします。そんな状況ですから、折角の機会、よりよい図書館を作るために勉強させていただこうと思ひます。果たしてどれほどお役に立てるかどうか、覚束ないのですが、なるべく努力しますので、よろしく願ひします。

企画委員 三好 定男

(金光図書館)

私は、現在三児のパパで子育て真ん中の三十代前半の男性です。図書館勤務は、十年以上になります。が、極度の人見知りのために県内の図書館関係の友人は、指折り数えるほどしかおりません。図書館内では、色々なアイデアを提案しては、却下される常習犯です。今注目していることは、電子図書の出現により、図書館がどのような対応を迫られるのかなど、図書館を取巻く難題などに興味があります。

企画委員 原田 恭江

(笠岡市立図書館)

今年度より企画委員をさせて頂いたことになりました。

昨年度、図書館のリニューアルオープンとシステムのバージョンアップをバタバタながら無事に終えることができました。ほっとしているところにお話をいただき、参加させて頂いたことになりましたが、今になって協会創立六十周年のプレッシャーを感じて

います。

委員会ではさまざま意見をきくことができ、刺激を受けるので、とても楽しみにしています。精一杯努めさせて頂いたのだと思いますので、よろしく願ひいたします。

企画委員 八幡 美紀

(倉敷芸術科学大学附属図書館)

大学図書館に勤務するようになって一年余り、知識も経験もない自分が企画委員になつても良いのだろうかという不安と戸惑いの中、第一回目の委員会に参加しました。各委員の皆さんの持つている情報量と人との繋がり、の広さに圧倒された一日でした。これまで他の図書館の方々と交流があまりなかったのですが、企画委員会を通して図書館を取り巻く状況や問題、各館の取り組みなど様々なことを勉強させて頂いたのだらと思ひます。どうぞよろしく願ひいたします。

企画委員 戸嶋 美江

(山陽学園大学・山陽学園短期大学図書館)

この度、企画委員をさせて頂いたことになりました。公立図書館の方々は、同じ図書館員とはいえ交流する機会が少ないため、違った館種の方々と意見交換できるのを楽しみにしています。

また一利用者として、もっと楽しめる図書館、もっと身近に感じられる図書館を作りたい……。そうならば老後もまた楽し！かな？
どうぞよろしく願ひいたします。

●事務局から●

前号で紹介いたしました新設図書館「西大寺緑化公園緑の図書室」と掲載いたしました「西大寺緑化公園緑の図書室」の誤りでした。謹んでお詫びし、訂正いたします。

このたび、新しく入会された方を御紹介します。

- 清友 雅子 (個人会員)
- 笹岡 久美子 (個人会員)
- 塩田 美知江 (個人会員)
- 高見 京子 (個人会員)
- 中田 和子 (個人会員)
- 萩原 史子 (個人会員)
- 矢部 恵 (個人会員)

平成二十二年十一月三十日
〒七〇〇一〇八二三
岡山市北区丸の内二一六―三〇
岡山県立図書館
メディア・協力課 図書館協力班内
岡山県図書館協会
会長 西山 猛
(〇八六) 二二四―一二六九